文学近代化の諸相

—洋学・戯作・自由民権—

小笠原 幹夫 著

高文堂出版社

〈著者紹介〉

小笠原幹夫（おがさわら・みきお）

昭和30年　東京神田に生まれる。千代田区立一橋中学校・早稲田大学高等学院をへて早稲田大学文学部フランス文学科に学ぶ。
専攻　国文学（近世・近代文学）
現在　作陽音楽大学助教授
論文　『芝居にみる自由民権』「日本近代文学」第37集。『近松と近代作家』「作陽音楽大学紀要」24－2。『日本のラ・ヴァンデ――美作血税一揆についての一考察』「作陽音楽大学紀要」25－2ほか。
現住所　〒708　岡山県津山市横山338

著者承認
検印省略

文学近代化の諸相―洋学・戯作・自由民権―　©1993

平成5年4月25日　初版発行　定価2,000円（本体1,942円）

著　者　小笠原　幹　夫

発行者　手　島　正　治

発行所　株式会社　高　文　堂　出　版　社

東京都千代田区神田小川町2－4
美容ビル　郵便番号 101
電　話　東京（03）（3293）9491
振替口座番号　東京5－97250番

落丁・乱丁その他不良品がありましたら、本社でお取りかえ致します。

組版・図　書　印　刷
印刷・モ　リ　モ　ト
製本・塙　製　本

ISBN 4－7707－0426－7 C 3095

文学近代化の諸相

—洋学・戯作・自由民権—

小笠原 幹夫 著

高文堂出版社

まえがき

このたび、小笠原幹夫君の個人論文集が初めて出版されるはこびになった。いまやっと肩の荷を下したような思いがしている。おめでとう。

小笠原君は、昭和五十六年三月早稲田大学文学部フランス文学科を卒業した。卒業論文は『三銃士』『モンテクリスト伯』等の冒険小説を書いたアレクサンドル・デュマ・ペールを論じたものだったと聞いている。その後演劇科へ専攻替えして、近世・近代演劇の研究を始めた。最初のうちは研究のための基礎知識をおぎなうのに苦労していたようだが、持ち前の闘志で、三年後には修士論文『明治の旧派劇と周辺の庶民文芸の研究』を立派に書き上げた。瀬川如皐、河竹黙阿弥などを中心に、仮名垣魯文などの戯作、舌耕文芸と歌舞伎との関連を取り上げ、幕末から明治へかけての演劇の展開を論じたもので、ユニークな観点と視野で、新鮮であった。その大部の感触は今も手元に残っている。

しかし彼の知的好奇心は演劇のみにとどまらなかったようで一時、危まれる気もしたが、今回の論文集をみると、次第にその視野を広げて、明治初期文学のあらゆる分野に関心を注ぎ、意欲をぶつけて取り組んできたことに、改めて気づかされる。日本文学史上、幕末・維新期における、いわば転換期の文学の課題は、すでに戦前から本間久雄・柳田泉の両先生の先達によって堀り起こされ、早稲田の学統の一つにもなっている。

著者は、フランス文学から演劇学の研究へと携ってきたその、視野は高くひろがり、明治文学を維新・自由民権運動と、それぞれの時代状況や社会推移のうちに、明治文化の特異性を位置づけようとしているようにみえる。その取

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

り組み方も周到で、正面切った熱意をもって研究に望んでいる姿勢がみられて好ましい。

思えば、小笠原君が修士論文を提出した昭和五十九年の春は、小生も定年退職によって早稲田を去るときであった。だから彼は小生の、最後の指導学生ということになる。同じ道を歩む者として、前途洋々たる春秋をもつ彼に今後一層の精励と、柔軟な思考をもって、さらに豊かな研究のみのりを望んでやまない。

平成五年早春

郡司　正勝

目　次

まえがき……（郡司正勝）……3

Ⅰ

文政五年の翻訳劇……8
——宇田川榕菴の和蘭戯曲——

西周・津田真道オランダ留学の意義……23

教育思想家としての中村敬宇……40

Ⅱ

最後の仇討……64
——『冬楓月夕栄』をめぐって——

ジュール・ヴェルヌの日本文学に及ぼした影響……79

『扇の恨』と『ラ・トスカ』……94

Ⅲ

大デュマの日本文学に及ぼした影響……112
——大衆小説の源流として——
ノルマントン号沈没の芝居……127
坂崎紫瀾におけるフランス革命……145
——『修羅の衢』をめぐって——
初出一覧……163
あとがき……165

I

文政五年の翻訳劇――宇田川榕菴の和蘭戯曲――

西周・津田真道オランダ留学の意義

教育思想家としての中村敬宇

文政五年の翻訳劇

――宇田川榕菴の和蘭戯曲――

一、士大夫の文学と戯作

旧幕時代の洋学は、末期の開港前後まで、研究範囲が医学、化学、植物学などの自然科学、とくに技術的な側面に片寄っていたから、御一新後の西洋研究が堰を切ったように文化的なあらゆる方面に向かったのは自然の趨勢であった。元来、近代的な文学概念というものは、市民社会の所産であり、同時にその市民社会自体への批判精神に貫かれているものである。政治における民主主義、意識における共同体からの解放なくして、文学の近代化はない。もう一つ言葉を換えて言えば、個人の自覚、その尊厳という考えは、代議制・立憲政体の構築に伴って、工業化や国民教育の発展すること、すなわち国民国家の形成が必須の前提条件となるのである。近代以前には、治者と被治者とは画然と相分れ、その役職にない人びと、百姓町人が「上御政道を私議する」こと自体が刑罰の理由となったのであり、ま

た、生活に直接響かない限り、幕府がいかに横暴であろうと、そのこと自体を百姓町人が自分自身の問題として受けとめなければならない理由はなかった。明治にはいり、こうした状態を指して、福沢諭吉は「日本には政府ありて国民（ネーション）なし」と述べた。(1)

徳川氏時代の文学とは、朱子学を中心とした治者の文学であり、漢詩文や和歌を含んだ儒学・国学・蘭学の学問体系全体を指していた。すなわち、文武両道の「文」というもののなかに哲学も思想も歴史も、一切が混在していたのである。今日言うところの小説・詩歌・演劇などは、かえって非文学の扱いを受けていたことは、福沢諭吉や中村敬宇といった明治初年の啓蒙思想家の言葉に端的にあらわれているところである。柳田泉は、経世済民を志す治者の文学を「上の文学」、戯作を中心に据えた町人文学を「下の文学」と名づけ、近世的文学像の輪郭を、二つの文学概念の対立として把握している。柳田のいう「上の文学」と「下の文学」の対立は、内田不知庵のいう「硬文学」と「軟文学」の二つの文学概念にほぼ重なるものと考えてよい。要するに旧幕時代の文学は、町人文学と、朱子学・国学・水戸学・洋学といった、維新史を準備した国内的諸運動・諸イデオロギーとが、真ッ二つに割れていたのであり、両者は、融合することは勿論のこと、するどく対立し合うこともなく、互いの無関心と断絶の姿勢しか示し得なかったのである。

文久二年、幕府は開陽丸の建造をオランダに注文し、これに伴って西周助・津田真一郎らにオランダ留学を命じた。これは、主として海軍に関する諸技術を習得する目的に出たものではあったが、西周と津田真道は、自然法学・国際法学・国家諸学・財政学・統計学等を研究し、内田恒次郎、榎本釜次郎らは造船術・機械を、赤松大三郎、田口俊平らは兵学を、林研海、伊東玄伯らは医学というように、それぞれ専攻を別にして、志す学問、技術の習得に専念した。(2)すなわち鎖国時代には余り見られなかった経済・法律・哲学というような人文科学的な分野に新たなる一生面を開い

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

たのであり、そこにすでに西洋文学を受けいれる要素が微かながら存在していたが、当時と現代とでは第一に文学という概念からして全く喰いちがっていたのであるから、洋学者がヨーロッパの狭義の文学――坪内逍遥の言に随えば、「美術」的の文学――より影響をうける接触点の存在する余地は極めて少なかった。

二、鎖国時代の翻訳文学

日本における西欧文学の翻訳・紹介は、厳密に言えば、明治になってから始まったのではなく、遠く封建時代まで遡らなければならない。が、文禄慶長の昔は知らず、鎖国以後の洋学者の間では、極々少数の好事的精神の持主が、余技としてこれに携わるのみで維新期に及んだ。例えば、旧幕府の所蔵本を移した静岡の葵文庫には、トリストラム・シャンデーやディッケンズの小説、仏訳のドンキホーテ、シャトーブリアン全集といった、若干の文芸書があるので、あるいは末期の英仏学時代にこれを読んだ人びとがあったのかも知れない。柳田泉によると、高野長英の伝記にも、長英が蘭文の小説を愛読したという記事があり、英学者尺振八（せきしんぱち）なども好んで英国小説を読んだということである。[3] そして洋学者のなかには、文芸翻訳に筆を執るものも稀にあった。

嘉永の初年（一八四八）、江州膳所藩の黒田麹盧（きくろ）が「ロビンソン・クルーソー」をオランダ語版から重訳した。『漂荒記事』、これがおそらく日本に西欧の文芸が植え付けられた嚆矢であろう。ついで安政四年、横山由清によってやはりオランダ語から翻訳された『魯敏遜漂行紀略』が自費出版された。文久元年には、神田孝平がオランダの探偵小説二篇を訳し、それを『和蘭美政録』という名で紹介した。[4] これらよりはるか以前の安永三年（一七七四）に出た『和荘兵衛異国奇談』がスウィフトの「ガリヴァー旅行記」の翻案であるという説もあるが、これは史的

考証が難しく定説にはなっていない。また、杉本つとむによると、『那波烈翁戦記』『魯敏遜漂行紀略』『颶風新話』などが、明治維新以後のいわゆる政治小説の先駆的役割の意義を果したということである。(5)

西欧の詩の移入に目を転じると、すでに文政六年（一八二三）、肥後の国学者中島広足（ひろたり）は、オランダ通詞猪俣久蔭の依頼で、「やよひのうた」と「又同しこころの歌」の二篇を『阿蘭陀国風詩』と題して翻刻した。和歌でもない、漢詩でもない、訳詩と長歌の融合による新体詩の濫觴である。ほかに勝海舟がローフデン・ヘールなる讃美歌を『思ひやつれし君』として和訳しているが、これは海舟の青年時の作とのみで翻訳の年月は定かではない。(6)

旧幕の西洋文学の翻訳で、小説と詩歌に関して今日まで世に知られているものは大体以上で尽きるであろう。演劇の分野では、大正五年四月に伊原敏郎が「早稲田文学」に『日本に於ける沙翁劇』という論文を発表している。それによると、文化七年（一八一〇）正月、江戸の市村座で上演された『心謎解色糸（こころのなぞとけたいろいと）』がシェイクスピアの『ロミオとジュリエット』に酷似するから、両者にはきっと深い關係があるだろうというのである。伊原は両者の筋書を比較して「南北が何等かの機会によって沙翁劇の筋を聞いたので、其れを自分の作に翻案したのだろうと思ひます。文化時代といへば、日本はまだ鎖国主義を厳重に守った時ではありますが、長崎の出島には外国人が渡来して、（中略）外国の文明と接触する間に、欧州の文学のうちで各国に持囃された沙翁劇の事が日本人の耳に入るやうになったのは蓋し自然の経路と言はねばなりません。」と断定的に述べているくらいである。が、しかしロミオとジュリエットの悲劇の局面は、日本の演劇の伝統中に類似の趣向を見出し得ないものではない。しかも、開国以前のシェイクスピア伝播経路は証拠立てられる筈もなく、伊原の論は比較文学の珍説として否定的な捉え方しかされていないのはけだし当然であろう。

もし日本で外国の芝居が演じられたとしたならばそれは長崎において以外には考えられないが、例えば『長崎名勝

図絵』の如きは出島和蘭屋敷の年中行事などにも相当に注意を払って記述してあるにもかかわらず、オランダ芝居のことに至っては、寸毫もこれに関した記事がない。また、安政四年に長崎海軍伝習所に招聘されたリッダー・ホイセン・フォン・カッテンディーケの日記の中に、米国軍艦ミネソタ号において水夫と黒人が歌曲と舞踊が交っている芝居を演じ、なかなか面白いものであったという事が記載されているが、これとて日本人の目前で演じられたものではない。したがって、維新以前にわが国で泰西戯曲が演じられたのは、本稿でとりあげる文政三年の上演が唯一の例で、それ以外には全く記録は絶無であり、出島の年中行事として行われていたのではないということを確認しておきたい。

三、世界史の中の出島蘭館

文政三年にオランダ芝居が上演されるに至った原因は、日蘭貿易の停滞と再開、すなわち当時のオランダと日本を取り巻く世界史の大きな流れと切り離すことのできない關係を蔵している。

フランス大革命が起こると、近隣の諸国は連合して軍隊を出し、革命フランスを押しつぶそうと企てた。ところがフランス国民議会軍はこの連合軍を撃退し却って隣国を攻略した。一七九五年、オランダのウィルレム五世はイギリスに亡命したので、フランスはオランダの地を保護下に置いてバタヴィア共和国を建てた。英国はこの機に乗じて、フランスに対する交戦権をオランダの船舶及び植民地にまで行使し、これがためにオランダの東洋における多くの植民地は英国に奪われ、またその通商は大打撃を蒙る。長崎にあった出島和蘭商館もその余波を受けることになり、ジャワ及びその付属地を占領した英国のサー・スタンフォード・ラッフルズは出島蘭館を奪取すべく画策し、文化五年（一八〇八）には英艦フェートン号がオランダ船を拿捕する目的で突然長崎に入港し、オランダ商館員及び筑前・肥

前両藩の警備兵を威嚇した。当時出島にいた甲比丹（カピタン）ヘンドリック・ドゥーフはなかなか知略に富んだ人物で、また日本側も極力これを助けたので、結局ラッフルズの長崎攻略は成功せず、全世界の中に出島だけはオランダの国旗が翩翻とひるがえっていることができた。しかしその結果、長崎には文化六年から文化十四年までの九年間にオランダの船は一艘も入港せず、ドゥーフを始め六人の商館員達は、本国との連絡も全く絶え、貿易の利益どころか日常の生活物資まで欠乏し、わずかに日本側の好意で補給を受けて生活する場合もあった。

一八一三年、ナポレオン一世がライプチッヒに敗れ、その翌年にはヨーロッパの動乱もおさまった。商品や必需品を船足深く積んだオランダ船が、ドゥーフの功労に報いるためオランダ国王から授けられた和蘭獅子士勲章と、更に新甲比丹ヤン・コック・ブロムホフを運んできた時に、丁度、新しく長崎奉行として就任したのが、筒井和泉守政憲である。筒井政憲は後に幕末外交問題、とくに対露交渉に活躍し日露和親条約を結んだ人であり、文政三年（一八一七）の十月に長崎を引き上げるまでの三年間、和蘭商館の九か年に亙る損失を補うために幕府に運動してやった。この尽力によって、筒井がいよいよ長崎を引き上げ江戸の町奉行に栄転することに決まった文政三年に、幕府は和蘭商館に対してこの年より向う三年間、銅の輸出定額三十万斤を九十万斤に増加してやり、更に全商額を銀一二五〇貫目に増加してやることになった。蘭人達が筒井奉行の長崎引上げに対して感謝の気持で別れを惜しんだことは言うまでもない。(7)

オランダ芝居は、出島の甲比丹の屋敷で文政三年九月二十四日に行われることになった。この日、甲比丹ブロムホフ以下出島の蘭人達は盛宴を設けて、筒井和泉守と、彼の後任として命を受けた同僚の間宮筑前守信興を迎え、その余興として歌を伴う二つの劇を供覧せしめたのである。後にシーボルトに重用される洋画家川原慶賀は、和蘭戯芸『オルゲデュルディゲ』二場と『二人猟師乳汁売娘』一場を精密に描いている。(8)

さて、芝居の詳細については後で述べるが、この時の役者は和蘭商館員と当時碇泊中のオランダ船乗組員の中から選抜された蘭人ばかりの上演だったから、科白も歌もすべてオランダ語に依って行なわれた。今日、筒井政憲が自筆で書いた『喝蘭演戯記　二巻』という未刊本（新村出編『海表叢書　第二巻』所収）が残されているが、そこで筒井はこの時のことを、「大体の筋はよく推察することができても、役者が会話を始めると何を云っているのかこれを理解することはできなかった。このため、この芝居の筋書を長崎通詞に命じて日本語に翻訳させ、その訳文を読むことによって初めて芝居の内容を理解することができた」[9]と告白している。この『喝蘭演戯記』には成稿の年月日は記入されていないが、文政三年に筒井のみた二つの劇の筋書が詳細に記されている。太田南畝の『一話一言』に、「阿蘭陀俄芝居狂言」として、この時のオランダ芝居の筋書が掲載されているが、その本文の末に「文政四年正月二十七日触山写す」とあるので、長崎で芝居が上演されてから長くとも四か月の間には執筆されており、更にこれが写し取られていたことが分かる。

四、オランダ芝居の内容

さて、芝居の当日、出島の甲比丹の屋敷の中に作られた舞台の正面には美しい幕が張られ、その幕の中央にはオランダ王室の紋章の付いた香盤が描かれ、この香盤に左右から花束を捧げている可愛らしい羽翼の生えた二人の天童が配されていた。香盤の紋章中には、勲章などに刻されることのある Je mainteindrai「我れ防がん」というフランス語が書かれてあり、また幕の上部にはリボン模様に Vita brevis, ars longa「命は短し、芸は長し」というラテン語の文句が飾られた。更に舞台の左右両端にはオランダ国旗が描かれ、それには「出島に於て我れ一ト狂言を競ひ、戯

場をかまへて Apollo アポローの神に奉る」という意味の句が記されていた。(10)

宇田川榕菴の『弐人猟師乳汁売娘（ふたりかりうどちちうりむすめ）』は、このとき出島蘭館で演じられた二つの芝居のうち、de Twee Jaagers en het Melkmeisje 二人の狩人とミルク売りの女、を翻訳したもので、テキストは早稲田大学洋学文庫の『和蘭芸弐人猟師乳汁売娘』と、武田薬品所蔵『和蘭志略　十二巻』所載の「戯場」の項目におさめられたものとの二種が存する。いずれも榕菴自筆本で、早大洋学文庫所蔵本の方には榕菴写のオランダ語原本 de Twee Jaagers en het Melkmeisje が添付されている。その表紙には、P. P. Lynslager リンスラーゲルという作者名、及び一七八三年にアムステルダムで上梓されたと記されている。内容については、早大洋学文庫本も『和蘭志略』も殆ど同一で、あるリッダーの称号をもつ貴族の娘ベルレッテが同じリッダー官のタンケレードなる者と出奔したが途中で男に捨てられ、片田舎のミルク売りに成り下がっている。そこへ友人コラスと共に熊狩りに来た狩人ギリヨットが、この娘を見て恋慕するというのが第一段の筋。第二段は言葉なくただ仕方のみで、タンケレードが前非を悔いて娘を尋ねて来て、共に父親に詫びを入れ、めでたく結婚するという場面を見せ、最後に登場人物が出てダンスをやるという、極く他愛のない筋の狂言である。音楽入りで処々に歌曲やダンスを交えた今日のレヴュー式のものであったらしい。戯曲原本のコピーが現存するところから、榕菴が自分で写し取った戯曲を今度は邦文に訳したものと思われる。また、二つのテキストとも冒頭に「役者替名の次第」すなわち長崎で演じられたときの配役が列挙されてある。いま『和蘭志略』の方から引用すると、

演目（きゃうげん）数篇あり、其内「テエー　ヤーゲルス　エン　メルキメーシー」と題せる一曲は、文政三年庚辰の秋、長崎に在留せる西客共、出島館内に於て、戯に素人狂言を興行せしにて、其様を知るべし、弐人猟師乳汁売娘（ふたりかりうどちちうりむすめ）と題して、役者替名の次第、左の如し

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com